

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

消滅の危機に瀕した第二言語： パラオに残存する日本語を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渋谷, 勝己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001908

消滅の危機に瀕した第二言語 パラオに残存する日本語を中心に

渋谷 勝己

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 1 はじめに | 5.2 聞き手配慮に関するカテゴリ |
| 2 消滅の危機に瀕した言語としてのパラオの日本語 | 5.2.1 丁寧体と常体 |
| 3 調査の概要 | 5.2.2 文末詞 |
| 4 パラオの日本語における可能文 | 5.3 命題の捉え方に関するカテゴリ |
| 4.1 可能形式の用例分布 | 5.3.1 ノダ |
| 4.2 助動詞レルの使用 | 5.3.2 ダロウ |
| 4.3 個別的特徴 | 5.4 命題部に隣接するカテゴリ |
| 4.4 ヤップの日本語との異同 | 5.4.1 極性 |
| 4.4.1 ヤップの日本語における可能文 | 5.4.2 ヴォイス |
| 4.4.2 パラオとヤップの異同 | 5.4.3 アスペクト・テンス |
| 5 パラオの日本語における動詞文 | 5.5 各カテゴリの分節度 |
| 5.1 使用された動詞数 | 6 まとめ |

1 はじめに

「消滅の危機に瀕した言語」に属する言語として、一般に、もともとその言語を母語とする集団が、政治・経済・社会的な諸条件によって、(何世代かかけて)ほかの言語に母語をシフトした(しつつある)ために、

- (a) 次世代に継承されなくなった言語
- (b) 関連して、話者数が非常に少なくなった言語
- (c) 話者がいたとしても、以前の話者たちがもっていた当該言語のコミュニケーション能力 (grammatical competence, sociolinguistic competence, discourse competence, strategic competence 等を含む communicative competence), そのなかでも特に文法能力 (grammatical competence) をもたない話し手 (semi-speaker) が多い言語

などがあげられることが多い。しかし、世界の言語の状況を見ると、このようなプロトタイプからはずれた(あるいはこのような特徴づけがむずかしい)、さまざまな「消滅の危機に瀕した言語」が存在する。そのなかには、戦争等によって話者が虐殺された言

語、構造的に類似する大言語に飲み込まれた言語（日本の方言など）、一方にはその言語を話す大集団がありながら移住した小集団のなかでは消滅しつつある言語などが含まれるが、パラオに残存する日本語も、個別的な性格を示す消滅の危機に瀕した言語の一つである。

本稿ではこの消滅の危機に瀕したパラオの日本語を取り上げて、その特徴を探ることを試みる。具体的にはまず、パラオに残存する日本語の社会言語的な特徴を整理しつつ、それを「消滅の危機に瀕した言語」の一つとして位置づけることを試みる（2節）。続いて、個別的な文法カテゴリとして可能文を取り上げて、この日本語変種の言語的な特徴を分析する（4節）。また、可能文以外の動詞文一般について、その文法カテゴリの分化の様相を素描することによって、その言語的な特徴をさらに明確にする（5節）。

2 消滅の危機に瀕した言語としてのパラオの日本語

本稿で言うパラオに残存する日本語とは、パラオが日本の植民地であった戦前・戦時中にかけて日本語（国語）教育を受けた現地の高年層の人々が維持する、（外国語ではなく）第二言語としての日本語（能力）のことである。

これら高年層の人々のなかには、当時、日本語能力が、自身の母語であるパラオ語の能力と同じ、あるいはそれ以上のレベルに達したという話者もあった可能性があるが、終戦後、日本人が引き揚げ、日本人との接触も限られるようになって、その日本語能力は徐々に衰えを見せつつある。日本語からの借用語を除いて、次世代に日本語が継承されるということも起こっていない（Matsumoto 2001）。いずれパラオの日本語は、（近年、パラオの若年層が日本語を外国語として身につけるような場合を除いて）消滅する運命にある。ちなみに、日本語を話すと思われる65歳以上の人口は、2000年の世論調査（Office of Planning and Statistics 2000, *2000 Census of Population and Housing of the Republic of Palau*）によれば、全人口19,129人の6.6%、約1,250人である。この数字には公学校に行かなかった人も含まれているので、実際に日本語を話す能力をもつ人の数はこの数字よりも少ないと思われる。

ここで、パラオの日本語を、社会言語面から特徴づけてみることにしよう。

第1節で述べたように、一般に、言語Aから言語Bへ言語が交替するという場合（language shift）には、3世代にまたがって、図1のようなステップを踏んで起こるのが典型である。

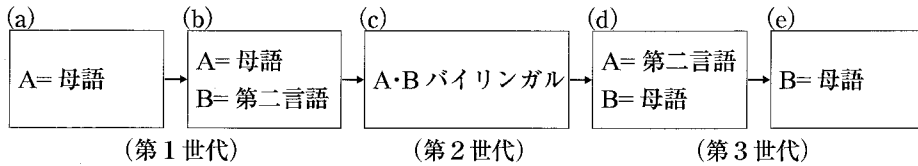


図1 言語の交替過程

このステップのうち「消滅の危機に瀕した言語」として位置づけられるのは、通常、(b) ~ (d) のいずれかの言語状況にあるマイノリティの言語、特に (d) における言語 A であろう。

一方、本稿で分析の対象とするパラオの日本語は、次の3点において、上のような一般的な状況と異なるところがある。

- (i) パラオの日本語は、図1では (b) (一部のパラオ人にとってはさらに (c) もしくは (d) の段階でとどまった言語 B であり、他の消滅の危機に瀕した言語 (通常は言語 A) とは異なる位置づけをもっていること (パラオにおける言語 A はパラオ語)。
- (ii) 日本語の習得が10歳以前から始まっているために、(a) から (b) または (c) への移行のプロセス (=習得過程) と、(c) から (a) への回帰のプロセス (摩滅過程¹⁾) が、一世代=個人という、比較的短い時間のなかで起こっていること。
- (iii) (この点はさらに確認する必要があるが) 一般に言語接触の状況においては、(c) の段階の言語 A・B や (d) の段階の言語 A は、互いに収束 (converge) したり (前者の場合)、言語 B から文法や語彙を取り入れたり (replace) することがあるが (後者の場合)、パラオの日本語 (言語 B) は、パラオ語 (言語 A) と収束して一つの接触言語を創出したり、パラオ語の要素を取り入れたりするということはほとんどなかった²⁾。両言語は、少なくとも形式面においては、基本的に切り離されているようである。したがってパラオの高年層の人々の保持する日本語 (能力) は、それ自身において摩滅するだけである。

ここでパラオの日本語が置かれている社会言語的条件をより明確にするために、さまざまな日本語習得・維持・摩滅のありかたとその社会言語的条件を対照するかたちで整理してみよう。表1のようになる。

表1 日本語習得・維持・摩滅のタイプとその社会言語的条件

	到達レベル	母語の維持	習得開始時期*	習得環境**	日本語維持率
パラオ	高	あり	10歳前後	自然・教室	高
外国語	低	あり	様々	教室	低
短期留学	中	あり	20歳前後	自然・教室	中
来日子女***	高	あり/なし	10歳以前	自然・教室	様々
長期滞在	高	あり	20歳前後	自然・教室	高

* もっとも典型的なケース

** 自然:自然な場面での習得, 教室:教室場面での習得

*** 来日した商社員, 留学生などの子女

この表からわかるように、同じく日本語が摩滅するといっても、パラオの日本語話者の場合には習得がストップしてから50年以上経過した現在でも高いコミュニケーション能力を維持しており、日本語を外国の教室で外国語として学んだり（表1の「外国語」）、日本に短期留学して学んだり（表1の「短期留学」）した日本語が摩滅するといったケースとは異なる³⁾。また、パラオにおいては日本語は基本的に第二言語であり続ける（た）といった点で、商社員や留学生とともに来日した子どもたち（表1の「来日子女」）が一度日本語にシフトし、帰国したあとでその日本語能力を失ってもとの言語にもどるといった二重に言語交替が起こる状況とも異なっている。強いて類似する状況を探すとすれば、習得を開始する年齢に違いがあるものの、日本に長期間滞在して日本語を第二言語として身につけた学習者（表1の「長期滞在」）が、帰国してその日本語能力を徐々に摩滅していく状況があげられよう。

しかし、日本への長期留学から帰国した学習者が日本語能力をどのように維持し、摩滅させるのか、その変化を追究した研究は現在までのところ、まだほとんど見あたらない。このことは、ほかの言語の摩滅過程を取り上げた研究についても同様である。縦断的な研究ではないが、習得がストップしてからほぼ50年が経過した日本語の実態を明らかにしようとする本研究の意義の一つはここにある。また、将来、仮に日本語が日本においてもすべての話者の第二言語となり、さらには消滅の危機に瀕するといった事態が起こった場合、図1の(c)～(e)の段階にかけてどのような変化が日本語に起こるのか、そのようなことを考えてみるための材料を得ることができるといった点に、本研究のもう一つの意義が見出されよう。

以下、パラオに残存する日本語の特徴について、具体的な分析を行う。

まずデータ収集のために行った調査の概要を説明したあと（3節）、個別的な文法事象として、可能文（特に述語の可能形式）を取り上げてその特徴を把握する（4節）。続いて、パラオの日本語の動詞文一般に見られる特徴を、それぞれの文法カテゴリごとに概観することにする（5節）。

3 調査の概要

本稿で分析するパラオの日本語のデータは、以下の3回の調査によって得られた談話データである。

第1回調査

- (a) 場所 : パラオ (ベラウ) 共和国コロール州およびアイライ州
- (b) 調査期間 : 1994年8月19日～25日, 1995年7月30日～8月17日
- (c) 調査者 : 崎山理・由井紀久子・渋谷 (1994年), 渋谷 (1995年)
- (d) 調査法 : インフォーマント一人一人を個別に訪問し, インタビューを行った。話題は公学校での教育, 日本時代の思い出などが中心。
- (e) インフォーマント: 表2参照

第2回調査

- (a) 場所 : 同上
- (b) 調査期間 : 2000年8月5日～20日
- (c) 調査者 : 渋谷
- (d) 調査法 : 同上
- (e) インフォーマント: 表2参照

第3回調査 (調査期間 (2001年8月8日～21日) 以外は第2回と同じ)

調査法については、調査の対象がインフォーマントの第二言語であり、また50年以上の歳月を経てその日本語能力が衰えつつあることもあって、内省等を求めることはしなかった。分析の対象は会話のなかで得られたそれぞれの発話である。したがってその (運用能力ではなく) 言語能力を探る (あるいは文法を記述する) という目的においては問題を抱えていることはまぬかれない。この点については今後の課題である。

3回の調査のインフォーマントは、戦時中に日本語 (国語) 教育を受けた、60歳以上 (調査時) の高年層男女である。本稿では、日本語能力を異にすると思われる、表2の5名の会話データを分析の対象とする。

表2 インフォーマント一覧

インフォーマント	性	生年	日本語学習歴	第1回	第2回	第3回
L	M	1929	公学校本科・補習科	1994	○	○
A	F	1930	公学校本科・補習科	1995	○	○
T	F	1930	公学校本科・補習科	1995	○	○
M	F	1929	公学校本科・補習科	1994	○	—
Y	M	1933	公学校本科	1994	—	—

表に「公学校」とあるのは、日本によって設置された、島の人々だけが通った小学校相当の学校で、本科3年、補習科2年からなる。教育言語は、パラオ語と日本語の通訳者がついた1年生の期間を除いて、すべて日本語であった（当時の日本語習得環境については渋谷2001を参照されたい）。第1回調査については調査した年度を、また第2回調査については2000年度と2001年度の調査の実施状況を記載した（「○」は調査実施、「—」はインフォーマント逝去のため調査せず）。なお、筆者の印象では、この順番（L>A>T>M>Y）で日本語能力が高いと思われる。

以下、それぞれのインフォーマントのインタビューデータについて、最初の45分を分析の対象とする（4節の可能文については3回全部の調査データを、5節の動詞文については第1回目の調査データのみを対象とする）。

4 パラオの日本語における可能文

本節では、パラオに残存する日本語の具体的な例として、高年層話者の日本語会話のなかに現れた可能文の特徴を取り上げる⁴⁾。まずパラオの日本語の可能文、特に述語の可能形式に見られる特徴を概観したあと（4.1～4.3）、同じミクロネシア地域に残存するヤップの日本語における可能文の特徴と比較することによって、その特徴をさらに明確にすることを試みる（4.4）。

4.1 可能形式の用例分布

パラオの5名のデータについて、述語の可能形式を整理すると、表3のようになる。表の見方は次のとおり。

(I) 形式

【(ラ) レル・五段】 = 五段動詞 + 助動詞レル

(1) 忙しくて手紙が書かれない

【(ラ) レル・他】 = 一段・カ変動詞 + 助動詞ラレル

(2) 忙しくてテレビが見られない

【可能動詞・五段】 = 五段動詞派生可能動詞

(3) 忙しくて手紙が書けない

表3 パラオの日本語における可能形式の用例分布 (3回の調査の合計)

	(ラ) レル		可能動詞		デキル			その他
	五段	他	五段	他	スルコトガ	VN	—	
L	5	2	11	—	—	2	4	
	3	2	8	—	—	2		
A	8	1	29	—	4	—	2	
	2	1	6	—	3	—		
T	—	2	3	—	3	—	2	見エラレル1 買エラレル3
	—	2	3	—	3	—		
M	1	—	10	—	—	—	5	
	1	—	4	—	—	—		
Y	3	—	3	—	—	—	4	
	2	—	2	—	—	—		
計(延べ)	17	5	56	—	7	2	17	4
使用率	15.7	4.6	51.9	0.0	6.5	1.9	15.7	3.7

計108例, Mは調査回数2回, Yは1回。

【可能動詞・他】 = 一段・カ変動詞派生可能動詞 (ラ抜きことば)

(4) 忙しくてテレビが見れない

【デキル・スルコトガ】 = スルコトガデキル

(5) 忙しくて手紙を書くことができない

【デキル・VN】 = VN (動名詞) デキル

(6) もう我慢できない

【デキル・—】 = 動名詞ガ+デキル, デキル単独使用等

(7) もう我慢ができない (動名詞ガ+デキル)

(8) いつかはできるだろう (デキルの単独使用)

(II) 上段・下段 (「デキル・—」を除く)

上段: 延べ用例数 下段: 異なり動詞数

(III) 使用率

延べ数による

なお、「飲めない飲めない」などの単純な反復は1例と数えたが、「これは飲めますが、それは飲めません」のような、単純な反復ではない例は、(この場合は「可能動詞・五段」の) 2例とした。

表3からは、次のようなことが理解される。

(a) 助動詞レルが使用されること

(b) 使用する可能形式に個人差があること

以下, 4.2および4.3において, この2点について考察する。

4.2 助動詞レルの使用

パラオの日本語では、基本的に母語話者と同じような可能形式が使用されているが、五段動詞について、可能動詞だけではなく、助動詞レルが使われることが特徴的である。たとえば次のような例である（以下、例の末尾の記号と数字はインフォーマントと調査年度。[] 内は筆者による注記、() は聞き取り不能の箇所。Rは調査者=筆者を表す）。

(9) ナイトスクールというと、大人、いや、子供でもやっぱりあの、それ取られます (L1994)

(10) [編み物は] 男はあんまり作られない。女だけ (Y1994)

これらの例について、レルと可能動詞のどちらが使われているかを動詞ごとに整理すると（渋谷2001a表7参照）、次のようなことがわかる。

- (a) 助動詞レルと可能動詞では、可能動詞を使用することのほうが多い（17例対56例）。
- (b) 2例以上用いられた動詞について、5名の話者すべてが可能動詞のみを用いる動詞、可能動詞のみを使用する話者（T）はあるが、5名の話者すべてが助動詞レルのみを用いる動詞、助動詞レルのみを用いる話者はない。
- (c) レルがもっとも用いられやすいのは「行ク」であり（「行ク」の例23例中12例、52.2%）、さらにLとMはイカレルを専用している。なおYにも、「行ク」について、

(11) こりゃー縁の下。こっちこっちは上。() けどあんまりこの下行かれない (Y1994, 自発的使用例)

のようなイカレルの使用が見出される一方、

(12) R: それ車で行けるところですか

Y: 行けるけどあんまり道が悪い

R: 天気の良い日は大丈夫ですか

Y: 今、今行ったら行ける (Y1994, 調査者の先行使用あり)

のように、イケルも使うことができる。(11)のように自発的に使用する場合にはイカレルを用いるといったことがあるのかもしれない。

以上、助動詞レル形については、パラオの話者は、動詞「行ク」についてはイカレルを最初から習得した可能性があるものの（イカレルは、東京方言を含めて母語話者のなかでも使用が多い）、そのほかの五段動詞については、基本的に可能動詞を習得したものであろう。これが、長い間日本語を使用することがなかったことから、一段動詞・カ変動詞と同様に、受身・尊敬と同じ形式を使用する方法に移行するといった、パラダイムの単純化が進行しつつあるのではないかと推測される。日本で話される日本語ではラ

抜きことばがその使用範囲を広げており、その伝播する背景として、受身・尊敬と形式的に区別できるといった機能的な要因があることが指摘されることが多い。しかしこのような機能的な説明が有効なのは、あくまでも日本語が日常的に使用される世界でのことである。

4.3 個別的特徴

次に、パラオの5名のインフォーマントを個人ごとに見たときの特徴をまとめてみよう。次のような点が指摘できる。助動詞・可能動詞類 (a) と、デキル類 (b) にわけて述べる (以下同様)。

(a) まず、助動詞ラレルや可能動詞に関して、Tに、買エラレル・見エラレルなどの可能動詞+ラレルのかたちが見出される。

(13) だが、わたしの同級生だったらもうみんな、ばーさんのように見えられるよ (T1995。「ばーさんのように見える」能力 (素性) をもつということを表現するために、可能形式を過剰に使用したものと解釈する)

(14) 15ドル [では] なんにも買えられないよ、今だったら (T1995)

この形式は、幼児の母語習得の過程などにも見出される過剰一般化形式である (渋谷1992)。Tはインタビューのなかで自身の日本語能力が低下していることをよく指摘するが、日本語能力が摩滅する過程において、(再度) 使用するようになった形式かもしれない。

(b) 次に、デキル類に関しては、次のような特徴がある。

(b-1) スルコトガデキルの使用は、AとTにのみ見出される。なお、スルコトガデキル7例の動詞は、見ル (2例)・スル・話ス (A)、買う・殺ス・暮ラス (T) であり、特に特定の種類の動詞について透明度の高いスルコトガデキルが使用されているといったことはなさそうである。

(b-2) 動名詞デキル (表の「デキル・VN」) を使うのは、Lだけである (売買デキナイ・発行デキルの2語)。

(b-3) 日本語中間言語に一般的に多いデキルの汎用、つまり、可能あるいは不可能であることだけをデキル・デキナイという形式によって述べ、その (不) 可能である動作の内容は聞き手に語用論的に推論させるといったデキルの用法が、相対的に日本語能力の低いMとYに観察される。(15) は「歩けない」、(16) は「行けない」といった、形態的に複雑な処理を必要とする可能動詞の代わりに使用されたものと思われる。

(15) R: 何時間ぐらい歩くんですか

M: [アイライ [地名] から] マラカル [地名] かアラカベサン [地名] ま

で。あんまり、長くない。アルゴロン [地名] からガラルド [地名] はあんまり長くない。いまの若い人はあんまりできない (ね)。あんまり仕事しない。なまいき言って (M1994)

(16) R:[そこは] 自動車で行けますか

Y:あー、できない。うん。道が悪いから。できない (Y1994)

以上個人的なバリエーションについては、それぞれの話者の、日本語(可能表現)能力を反映するところであろう。

4.4 ヤップの日本語との異同

4.4.1 ヤップの日本語における可能文

ここで、渋谷 (1995, 2002a) で分析した、同じ旧南洋群島に属するヤップ島に残存する日本語可能形式の特徴を確認し、パラオの可能形式の特徴をより明確にしておく。

ヤップの日本語の特徴には、次のようなものがある。(a) がインフォーマント間に見られた共通点、(b) が相違点でもある。

(a) 助動詞・可能動詞類について

(a-1) 五段動詞の可能形は、「捕ラレナイ・シャベラレナイ・行カレナイ」のように、可能動詞よりも助動詞レルを付加したもののほうが多い。特にラ行五段動詞に多く観察される。

(a-2) 「食ベテイラレル・生キテイケル」のような、補助動詞がある場合の補助動詞部が可能形をとっている例はない。

(b) デキル類について

(b-1) 「勉強デキル」「案内デキル」といった、動名詞に直接デキルが付加した複合形式は使われていない。

(b-2) 日本語能力の高いと思われるインフォーマントは(でも)スルコトガデキルを多用する。

(b-3) 日本語能力の低いと思われるインフォーマントには、デキルの汎用が観察される。

(a-1) はパラオの場合と同じように、助動詞レルに不透明さ(多義性)をもたらす結果にはなっているが、不規則な形式(可能動詞)をパラダイムから排除しつつあるところと考えられる。また、(a-2)や(b-1)は複数の形態素を同時に処理するといった面倒な形態的手続を回避しているところ、(b-2)は動詞部と可能部を別々に表現するといった、ことばを透明なものにしている(形式と意味が一对一で対応するようになっていく)ところであり、(b-3)は語彙項目における単純化である。

いずれも、母語話者の話す日本語よりも単純な構造になっていることが確認できる。

4.4.2 パラオとヤップの異同

パラオの可能文の特徴を、これらヤップのそれとくらべたとき、次のような異同が指摘できる。まず共通点としては、次のようなことがある。

(a) 助動詞・可能動詞類について

(a-1) 五段動詞について、助動詞レルによる可能形式が用いられること。ただし、行カレルについてはパラオ・ヤップの両方で多かったものの、ラ行五段動詞については、特にヤップにおいて顕著である。

(a-2) ラ抜きことばがほとんど見出せないこと。ヤップでは2例（いずれも食べレナイ）採取されたが、これは動詞の形態的な処理に問題を抱えがちな話者のものであり、安定したラ抜きことばの使用をうかがわせるものではない。

(a-3) 「食べテイラレル」のように補助動詞がある場合の補助動詞部が、可能形をとっている例はないこと。

(b) デキル類について

(b-1) 比較的日本語能力の高い話者にスルコトガデキルの使用が多いこと。

(b-2) 日本語能力が低い話者に、デキルの汎用が観察されること。

一方相違点としては、次のようなことがあげられる。

(a-4) パラオではヤップよりも可能動詞の使用率が高いこと（パラオ51.9%:ヤップ5.0%）。

(b-3) ヤップではパラオよりもスルコトガデキルの使用率が高いこと（パラオ6.5%:ヤップ35.0%）。

(b-4) パラオのもっとも日本語能力が高いと思われる話者Lに、動名詞デキル形が使用されていること。

(b-5) 単独もしくは名詞に後接したデキル（表の「デキル―」）の使用は、パラオよりもヤップに多いこと（パラオ15.7%:ヤップ30.0%）。

以上を総合すれば、次のようにまとめられるであろう。

(c) パラオ、ヤップいずれの可能形式にも単純化が起こっている。

(d) 日本語可能文の体系に単純化が起こる順序としては、次の順序が推測される（上から順に単純化が進む）。それぞれの単純化が観察されるパラオの話者をあわせて記す。

(i) 助動詞レルへの統合:L・A・(T⁵・) M・Y

(ii) スルコトガデキルの多用:A・T

(iii) デキルの汎用:M・Y

(ii) と (iii) が、4.3 (b) で述べた、インフォーマント間のデキル類の相違となつて現れている部分である。ちなみに、(～ガ) デキル>スルコトガデキル>VNデキルといったデキル類の使用の難易度(右側が難)は、江戸語から東京語にかけてデキルが可能形式化した順序とパラレルである(右側が遅れて発達)。

(e) 相違点をもとにすれば、パラオのインフォーマントのほうが日本語可能表現能力が総じて高い。ヤップの話者の場合、もっとも能力が高いものでも(ii)の段階まで単純化が進行している⁶⁾。

5 パラオの日本語における動詞文

次に、可能文を含め、パラオのインフォーマント5名の日本語発話に現れた動詞文の特徴を、より巨視的に把握することを試みる⁷⁾。具体的には、第1回目の調査で得られたデータの最初の45分(弱)に現れた、動詞文の主文末に相当する発話末641例(5名合計)を取り上げて、その文法カテゴリの特徴を分析する⁸⁾。

5.1 使用された動詞数

まず、それぞれのインフォーマントが使用した動詞の用例分布について整理すると、表4のようになる。

上段は各インフォーマントの全発話末数、中段はそのなかで各インフォーマントが使用した動詞の異なり語数であり、下段はその異なり語数のなかでそれぞれのインフォーマントのみが使用した動詞の数である。このような数字はもちろん、会話の内容に左右されるものであるが、本データでは話の内容は比較的統一されているので、くらべることに一定の意味はあろう。

この表および得られた発話からは次のようなことがわかる。

- (a) 各インフォーマントによって、使用した動詞の数が異なる。T・M・Yは、平均して2発話以上に同じ動詞を用いているが、LやAは異なった動詞を多用している。
- (b) 使用した動詞の語彙項目を個別的に見ると、複数のインフォーマントが用いた動詞が多いが、それぞれの話者のみが用いた動詞も少なくはない。しかも、各インフォーマントとも、必ずしも基本的な語彙だけを使用しているわけではなさそうである。ちなみに全員が使用した動詞は、アル・行ク・来ル・住ム・スル・卒業スル・使ウ・デキル・取ル・ナル・話ス・見ル・ワカル・忘レルの14語であった(「存在」については、Tがオリマセンのみを使用しているために、イルはこのなかには含まれない)。卒業スルや忘レル・住ムのような、話の内容に関連したものも含まれてい

るが、いずれも基本的なものばかりである。

次に、これらの動詞（文）のもつ文法カテゴリについて概観してみよう。形態素の配列順序とは逆であるが、まずもっとも外の要素である聞き手目当てのカテゴリから取り上げ（5.2）、徐々に命題側のカテゴリに移動する（5.3, 5.4）。

5.2 聞き手配慮に関するカテゴリ

5.2.1 丁寧体と常体

最初に、対者敬語（丁寧語）の使用状況を確認してみよう。表5のようになる。

この表からわかるように、インフォーマントは、L・A・Tのように丁寧体を多用するものと、MやYのようにほとんど使用しないものの、二極にわかれる。

このうち、M（女性）とY（男性）に丁寧体の使用が少ないことの原因としては、命題にかかわらない部分がまず単純化を受けたといったことが考えられる。

一方、丁寧体を多用するグループでは、LやAは、予測されるように、（過去の経験などを回想しつつ物語る場合に対して）質問や確認要求、依頼など、発話が特に聞き手志向の高い機能をもつ（聞き手の応答を義務的に要求する）場合に、丁寧体の使用が多い。

(17) あれ、内地のなかでどうなりますか（L1994, 質問）

(18) 一つのお願ひ頼みます（A1995, 依頼）

ただし、Lはこの点ほぼ例外がないものの、Aには例外も多くあり、Tには顕著な制約条件は見出せない。インフォーマントごとに差が大きいところである。

なお、丁寧体使用者のうちLは、AとTにくらべて常体の使用率が極端に高いが、これは、Lが男性であることを考えるべきであろう。すでに可能文を分析した際にも確認したように、Lの日本語能力は、社会言語能力も含めて高く、Yに丁寧体が少ないということとは異なった要因が働いている。

表4 使用動詞数一覧

	L	A	T	M	Y
全発話末数	160	102	158	112	109
全使用動詞数	108	68	65	54	46
当該話者のみの使用動詞数	52	23	15	10	12

表5 丁寧体と常体

	L	A	T	M	Y
丁寧体	41	64	75	2	3
常体	119	38	83	110	106
丁寧体率	25.6	62.7	47.5	1.8	2.8

5.2.2 文末詞

次に、同じ聞き手目当ての要素である文末詞を整理してみることにしよう。表6のようになる。丁寧体と常体では使用される文末詞が異なることがあるので、二つにわけて示す（以下の項についても同様）。

表6 文末詞一覧

	L		A		T		M		Y	
	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体
ヨ	7	6	8	—	14	20	—	4	—	7
ネ	6	15	—	1	—	—	—	9	—	—
ヨネ	—	—	—	—	10	26	—	—	—	—
ワネ	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
カネ	2	1	—	—	1	1	—	—	—	—
カ	2	1	6	—	—	—	—	—	—	—
ナ(ア)	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—
ゾ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
モノ	1	0	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	18	26	14	1	25	48	—	13	—	7
使用率	43.9	21.8	21.9	2.6	33.3	57.8	0.0	11.8	0.0	6.6
同	27.5		14.7		46.2		11.6		6.4	

この表からは、次のようなことが理解される。

- (a) 全発話末例のなかでいずれかの文末詞が使われている発話の率は、L:27.5%、A:14.7%、T:46.2%、M:11.6%、Y:6.4%で、MとYについては、丁寧体・文末詞、いずれの聞き手目当てのモダリティ形式もその使用率が低い。
- (b) 使用する文末詞については、インフォーマント間の個人差が大きいものの、その間に階層 (hierarchy) のようなものが見出される。具体的には、
 - (b-1) 5名すべてが使うのはヨである。
 - (b-2) ヨネ、ワネ、カネも含めて、4名がネ類を使用している。
 - (b-3) 単独のカの使用は、丁寧体の使用と連動するため⁹⁾、丁寧体使用者 (L・A・T) に傾く (ただしTの使用はない)。ちなみに、Lの常体でのカの例は、

(19) おまえなんかできるか (L1994)

といった、兵隊のことばの、反語としての使用例を引用した部分である。

- (b-4) その他の文末詞については、Lだけに使用が観察される。

以上から、日本語能力と関連して、

(20) ヨ>ネ>カ>ナ・ゾ・モノ

といった文末詞使用の階層が設定できるかもしれない。

なお、個人差については、次のようなことが指摘できる。

- (c) Tにヨネの使用が多い。

(21) [公学校時代] 暗算も、よくー、したよね、わたしだったら (T1995)

のように、話し手のみがもつ情報を聞き手に伝達する場合にもよく用いられている。

(d) Aの文末詞使用は、丁寧体に偏っている。

5.3 命題の捉え方に関するカテゴリ

次に、命題目当てのモダリティ形式について整理する。ここでは特に、説明のモダリティと判断のモダリティを取り上げる。

対象としたデータのなかに現れた説明・判断のモダリティ形式は、

(22) 高いカツオ70, 75セントだろうと思うね (L1994)

といった語彙的なものを除けば、ノダ (ノ・ンダを含む) とダロウ (デショウを含む) だけである (表7)¹⁰⁾。

目標言語には、ワケダ:ヨウダ・ミタイダ・ラシイ・カモシレナイ・ニチガイナイなど多様な形式があるにもかかわらず、これらの形式は全く使用されていない。本稿では、ノダ (5.3.1) とダロウ (5.3.2) について整理する。

5.3.1 ノダ

ノダに見られる特徴は、次のとおり。その用法については、母語話者のそれと異なる点は特に見出せていない。

(a) MとYにくらべて丁寧体や文末詞を多用していたL・A・T3名のうち、Tの用例が極めて少ない。これは、Tが丁寧体を多く使用し、しかもそのなかでマス体をほぼ専用している (丁寧体の例75中72例, 96.0%) ことと関係していよう。マスを優先的に選択してしまえば、目標言語のなかでも話し手の性といった点や優劣なノデスと語順を異にするといった点で特にマークされた形式であるマスノ、あるいは過剰に丁寧なマスノデスを使わない限り、ノダの使用を控えざるをえないからである。なお常体においては、母語話者の場合女性はノを使用することが多いが、次のような例を除き、A・Tいずれもノはあまり用いていない¹¹⁾。

(23) 毎朝、草をとったりまたほうきする [= 箒で掃く] の (T1995)

Lとくらべて常体での使用率が低いことには、理由は不明であるが、この、ノの不使用ということが関係している¹²⁾。

(b) 一方、聞き手配慮のための明示的なマークをほとんど使っていなかったMとYのうち、Yは、パラオの事情をよそものわれわれに説明する際にいくつか使って

表7 モダリティ形式一覧

	L		A		T		M		Y	
	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体
ノダ	6	25	20	1	—	2	—	1	—	13
ダロウ	8	—	5	—	4	—	1	—	—	2

いる。

- (24) 今マルキョク [地名] のあのアバイ [集会所] があるんだ (Y1994)
しかしMは、このような場合でもやはり命題の提示だけにとどまっている。
(25) タビオカもまだ、若いやつをとって食べる (M1994)
(26) [食べ物] 一週間の分をとってガラルド [地名] 来る (M1994)

5.3.2 ダロウ

ダロウ・デショウは全部で20の使用例があるが、その大半は、

- (27) あんたも英語習ったでしょ? (A1995)
(28) 式があるだろ? (Y1994)

のように、上昇調をとって確認要求を表すものである。

- (29) [日本語が] わかるでしょうね、50歳だと (L1994)
(30) [アイライにも公学校] ありましたでしょ (T1995)

など、蓋然性を表すものは6例 (L 4例, A・T各1例) に過ぎない。MやYは、ダロウ・デショウといった付属形式を使うよりも、むしろキットなどの副詞を用いて蓋然性を分析的に表現している。

- (31) きっとここらへんに新波止場がある (M1994)
(32) きっとこっち (Y1994)

以上パラオの日本語では、判断のモダリティは、動詞の文法カテゴリのなかでは最も分節されていない。

5.4 命題部に隣接するカテゴリ

最後に、命題部にもっとも近いところに位置するカテゴリである、極性 (5.4.1) とヴォイス (5.4.2) の使用実態を概観する。また、アスペクト・テンス形式の使用状況を、参考データとして掲げる (5.4.3)。

5.4.1 極性

まずナイヤンなどの、ほかに言い換えの手段あるいは表現手段のない否定表現から見よう (表8)。極性については5名全員が、その表現形式の必要性を反映して、肯定・否定を表現する能力をもっている。

ただし丁寧体における否定の表現形式については、L・A・Tの間で以下のような違いが観察される。

- (a) Aはマセンよりもナイデスという分析的な形式を多用する。
(33) あまりそうはたくさんいいないです (A1995)

表8 極性

	L		A		T		M		Y	
	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体
ン	3	2	1	—	15	—	—	—	—	—
ナイ	4	24	4	6	—	18	—	31	—	14
合計	7	26	5	6	15	18	—	31	—	14

(b) マセンを用いるLでも、動詞部分が可能などの複合形式になった場合には、処理のプロセスが複雑になるからかナイデスに変わる ((34b))。

(34) a だれがその先生になるかわかりません (L1994)

b お父さん、お母さん日本語わかるんだったら、島語言えないです (L1994)

(c) Tはどのような場合にもマセンを専用している (5.3.1 (a))。また今回のデータで丁寧体の否定過去を用いているのはTのみで、その形式はマセンデシタであった。

5.4.2 ヴォイス

ここではヴォイスを、述語に接辞が付加することによって格交替を引き起こす文法事象と広く捉え、受身・使役・願望文を整理する (可能文については4節を参照)。用例を整理すると、表9のようになる。

(a) 受け身の使用例は、発話末についてはL11例、T6例、Y1例 (ただし調査者のことばの反復) だけであり、採取の範囲を発話末以外に広げても、Lの5例、Aの1例、Tの1例が増えるに過ぎない。またこれらの受け身文25例の動詞の異なり数と延べ数 (カッコ内) を見ると、

L: (帳面に) ツケル, 笑ウ (2例), ヤル (8例), 飲マス, (～を～と) 言ウ
(食べ物) を取ル (=奪う), 撃ツ (2例)

A: 撃ツ

T: ナグル (5例), (～を～と) 呼ブ (2例)

Y: オコル

のように、使用例の多いLとTについても同じ形の繰り返しが多い。さらに、話題ともかかわって、戦時中、学校を含め、生活のなかでよく用いられたと推測される語彙が多く、用法も直接受け身に偏っている。

(35) みんなから笑われる (L1994)

(36) 民間はみんなやられたね (L1994)

(37) 指をこんなにしてなぐられるよ (T1995)

したがって受け身文については、様々な格パタンの例があるものの、生産的に用いる能力があるのかどうか、このデータだけではまだ判断することができない。チャンク的な受け身形式を多用している可能性も考えられる。

表9 ヴォイス一覧

	L		A		T		M		Y	
	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体
受身	—	11	—	—	1	5	—	—	—	1
使役	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
願望	—	3	3	1	—	—	—	1	—	—
合計	—	15	3	1	1	6	—	1	—	—

(b) その他のヴォイス形式については、願望のタイがL・A・Mにわずかに見られ（計8例）、使役はLが1回（さらに複文で1回）使用しているだけであった。

(c) なお受け身・使役いずれにも、（以下に示すTの例だけに限らず）発話を計画するなかでその使用を回避しているかに見える例があった。

(38) アンガウルは一月、でー、アメリカの人は取れた〔占領した〕よね、アンガウル（T:「アメリカの人に取られた」等の受け身の回避）

(39) そんなとき先生は、〔病弱だった〕わたしにー、あのなにかうちのなかでしていたよ（T:「させていた」等の使役の回避）

(40) あのー戦争のときみんなあのバベルダオブ行きなさいとゆったが（T:使役の回避）

(40) はこの地の日本語に直接話法が多いということの結果でもある。

5.4.3 アスペクト・テンス

最後に、参考データとして、アスペクト・テンスにかかわる形式の使用状況を表10、表11にまとめておく。これらの形式については、母語話者の用法と異なっているところもあり、今後、詳細に分析する予定である。

5.5 各カテゴリの分節度

ここで、極性以外の各文法カテゴリについて、（ゼロ形式でない）有標の形式のうち2名以上で10例以上使っているものの使用度数を整理してみよう。次のようになる（カッコ内は用例数・属するカテゴリ・全発話末数641に占めるパーセント。カテゴリ間の共起の実態については、渋谷1997の表1、表2を参照されたい）。

(41) タ (229:テンス:35.7) > デス・マス (185:ムード:28.9) > 文末詞 (152:ムード:23.7) > テイル (113:アスペクト:17.6) > ノダ (68:ムード:10.6) > 可能 (38:ヴォイス:5.9) > ダロウ (20:ムード:3.1) > 受け身 (18:ヴォイス:2.8)

一方、どのような形式も後接しない、単純ル形（辞書形）は83例（全発話末数の12.9%）であった。

表10 アスペクト・テンス形式一覧 (1)

	L		A		T		M		Y	
	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体
タ	9	44	20	13	42	37	—	40	2	22

表11 アスペクト・テンス形式一覧 (2)

	L		A		T		M		Y	
	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体	丁寧体	常体
テイル	6	21	6	4	3	27	—	27	—	19
テシマウ	—	15	—	—	—	—	—	—	—	—
テイク	2	1	1	—	—	—	—	—	—	1
テクル	—	4	—	—	—	4	—	1	—	—
合計	8	41	7	4	3	31	—	28	—	20

先に動詞の語彙項目に関連して5.1でも述べたように、このような数字は談話の内容によって変わりうるものであり、またそれぞれの形式は必ずしも母語話者と同じ形・意味・機能で用いられているわけではないことにも注意しなければならない。しかし、パラオの話者が用いた発話のもつ文法カテゴリの分化の様相をごくおおまかに把握することは可能であろう。あわせてこの数字は、当該カテゴリに属する形式の一定数の用例を集めるために収集すべき全データ数（発話数）を考えるための目安として活用することもできる可能性がある。

6 まとめ

以上本稿では、パラオに残存する日本語を「消滅の危機に瀕した言語」として位置づけて、その社会言語的な特徴（2節）、可能文の特徴（4節）、動詞文のもつ文法カテゴリ（5節）を概観した。

パラオに残存する日本語は、可能文をはじめとして、動詞文のさまざまな部分に単純化が起こっているものであることは上に述べたとおりであるが、それでも、50年以上にわたる長期の摩滅の過程に耐え抜いて、今なお健在である。その動詞文の文法を、それぞれのカテゴリごとに詳細に記述していくことが、次の課題である。

注

- 1) パラオでは現在、日本語にかわって、英語を第二言語として用いるようになってきているために、社会全体としては (a) の段階に回帰することはない。
- 2) 少なくともわれわれ調査者を相手とする日本語会話のなかでは、これまで、英語の単語や文が交じることはあっても、パラオ語のそれが交じるということにはなかった。なお、現在のパラオ語のなかには、借用語をはじめとして、上層言語としての日本語の痕跡が多い。
- 3) 4月から学習をはじめた外国語が夏休み期間中に摩滅するなど、短期間の習得に関しても摩

減は起こりうる。

- 4) 本節は、渋谷 (2002a, 2002b) によってまとめる。
- 5) Tは用例数が少ないこともあり、数字のうえからは確認できない。
- 6) ただしこの点については、母語の影響がかかっていないということを確認する必要がある。今後の課題である。
- 7) 本節は、渋谷 (1997) によってまとめる。
- 8) 中間言語によく観察されることであるが、それぞれの発話の境界 (末尾) は、比較的容易に指摘できる。
- 9) 行クカ、学生カといった常体でのカは、質問文では母語話者でも使用することは少ない。
- 10) 発話末以外でも、あれは酔っ払うはずはない (L1994) の1例があるのみである。
- 11) 本稿のインフォーマントではないが、パラオの日本語話者のなかにはノを多用する女性もいる。
- 12) AとTは、常体ではンダも使用していないが、ンダは男性が使うことばであるといった認識 (社会言語能力) をもっていると思われる。

文 献

渋谷勝己

- 1992 「言語習得」真田信治他『社会言語学』pp. 135-158, 東京: おうふう。
- 1995 「旧南洋群島に残存する日本語の可能表現」『無差』2, 81-96, 京都外国語大学日本語学科。
- 1997 「旧南洋群島に残存する日本語の文法カテゴリー」『阪大日本語研究』9, 61-76, 大阪大学文学部日本語学講座。
- 2001 「パラオに残存する日本語の実態——報告書・序章」真田信治編『消滅に瀕した日本語方言の調査研究』(科研報告書) pp. 285-302。
- 2002a 「パラオに残存する日本語の可能表現」渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相 (1)』(科研報告書) pp. 81-96。
- 2002b (印刷中) 「中間言語における可能表現のバリエーション」日比谷潤子編『現代日本語の音声・語彙・意味・文法・談話における変異と日本語教育』(科研報告書)。

Matsumoto, K.

- 2001 Multilingualism in Palau: Language contact with Japanese and English. In T. E. McAuley (ed.) *Language change in East Asia*, pp. 87-142. Richmond, Surrey: Curzon Press.